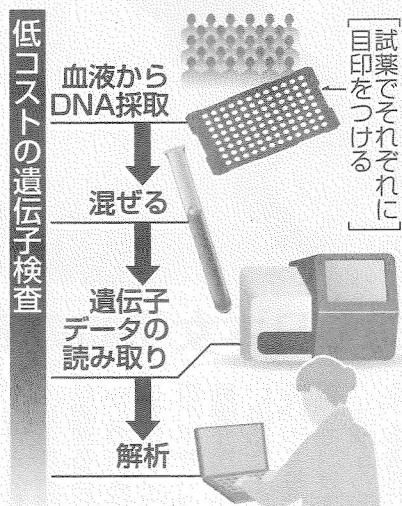


[平成29(2017)年2月12日]

日本経済新聞

乳がん引き起こす遺伝子異常

検査費用、10分の1で
国立遺伝学研が開発



乳がんや卵巣がん発症の可能性が高まるときれる遺伝子の異常を低成本で調べることがができる新たな検査法を、国立遺伝学研究所（静岡県三島市）の井ノ上逸朗教授（人類遺伝学）らが開発し、国内の特許を出願したことが11日、同研究所への取材で分かった。

新たな手法は、一度に大人数を調べるために当たりのコストを下げる。

を2万円程度まで抑えられる。井ノ上教授は「費用が安ければ多くの人が検査を受けられる」と話しておらず、2年をめどに20万～30万円の検査費用が実用化し、保険適用も目指す。ただ遺伝子に異常を提供しているが、一人

が見つかっても、発症のリスクは人によって異なるため、専門家による丁寧な検査結果の説明が必要となる。

検査で調べるのはBRCA1、BRCA2という遺伝子。本来はがんを抑制する働きをするが、異常があると十分に機能せず、遺伝性の乳がんや卵巣がんを発症するリスクが高まるとされる。

2遺伝子の異常を調べるために、一人一人の異常を調べる仕組み。

検査会社が医療機関を通じて提供しているが、一人約20万～30万円と費用が高い額で、検査を受ける女性は限られていた。

新手法は、検査を受けた人の血液からDNAを採取し、特殊な処理で一人一人のDNAに「目印」を付ける。96人分を一つの容器にまとめ、遺伝子の配列を高速で調べることができる「次世代シーケンサー」という装置にかけ、同時に解析。目印

をもとに、一人一人の異常を調べる仕組み。